

芥川龍之介「切支丹物」の材源（二）

——『さまよへる猶太人』——

須田千里

はじめに

『さまよへる猶太人』（大正六年六月『新潮』）は、従来、「いうまでもなく西欧に伝わる Wandering Jew 伝説がその出典である」（宮坂覺「さまよへる猶太人」、昭和五十八年三月『解釈と鑑賞』）とされながら、具体的にどのような書物に拠ったのか明らかにされて来なかった。本稿では、それが Sabine Baring-Gould (1834-1924) の *Curious Myths of the Middle Ages* に拠ることを具体的に述べる。なお、本稿は「芥川龍之介「切支丹物」の材源——『るしへる』『じゅりあの・吉助』『おぎん』『黒衣聖母』『奉教人の死』——」（平成二十三年九月『国語国文』）の続稿である。

一

Curious Myths of the Middle Ages（『中世の奇妙な神話』）は、ヨーロッパ中世の二十四の神話・伝説についてその起源を考察した書物で、1866・68年に上下巻が出版されて以来、1914年までに35版を重ねている⁽¹⁾。本書について、松村武雄『神話伝説大系』第3巻「ヘブライ篇」の「パレスチン民間神話伝説集」（昭和三年十二月近代社）所収「さまよへる猶太人（その二）」の註には、「パーリング・グルード氏⁽²⁾が、その著『中世紀の珍奇なる神話』(S. Baring-Gould, *Curious Myths of the Middle Ages*)の第一章に於て、委しくこれを研究してゐる」とあり、基本的文献として知られていた。「ハットー僧正と鼠」「聖ウルスラ物語」を含む同書第6巻「独逸篇」（昭和三年八月）「解題」（松村武雄）でも、当該巻の種本の第一として本書が挙げられている。

『さまよへる猶太人』前半で述べられたその目撃例等は、*Curious Myths of the Middle Ages* 第1章“The Wandering Jew”（pp.1-31）と内容が一致する⁽³⁾。さらに、本作で言及される「ウルスラ上人と一万一千の童貞少女が、「奉公の死」を遂げた話や、パトリック上人の浄罪界の話」（以下、引用は初出に拠る）、また、初出にありながら単行本で省かれた「メルジナと云ふ人魚」の話、「ハットオ僧正に関する話」も、それぞれ本書第14章“S. Ursula and the Eleven Thousand Virgins”（pp.317-340）、11章“S. Patrick's Purgatory”（pp.230-249）、19章“Melusina”（pp.471-523）、18章“Bishop Hatto”（pp.447-470）から得られる。

決定的なのは、本作末尾に、

自分は唯ここに、「さまよへる猶太人」の伝記の起源が、馬太伝の第十六章二十八節

と馬可伝の第九章一節とにあると云ふベリンググツドの説を挙げて、一先づペンを止める事にしようと思ふ。

とあることで、この「ベリンググツドの説」こそ、本書の著者 Baring-Gould が“The Wandering Jew”冒頭近くで述べる、次の文章に他ならない⁴⁾。

The words of the Gospel contain the germs out of which the story has developed. “Verily I say unto you, There be some standing here, which shall not taste of death, till they see the Son of Man coming in His kingdom,¹⁾” are our Lord’s words, (p.3.福音書の言葉には、この物語の発展してきた起源が含まれている。「誠に爾曹に告ぐ 人の子その国を以て来るを見までは 此に立ものゝ中に死ざる者あるべし¹⁵⁾」というのが、主の御言葉である)

原註1には、“Matt. xvi. 28. Mark ix. 1.”(新約聖書「マタイ伝」16章28、「マルコ伝」9章1)とあり、本作の語り手の指摘と一致している。

「切支丹物」第一作『煙草』(大正五年十一月『新思潮』。後題『煙草と悪魔』)で、高木敏雄『比較神話学』(明治三十七年十月博文館)第五章第三節「怪物退治説話」の「煙草の起源」「詐術」を材源としたように、芥川は当時、民間伝承や神話に興味を抱いていた。本書に着目したのも故なしとしない。

二

本作で、*Curious Myths of the Middle Ages* の“The Wandering Jew”はどのように用いられたのだろうか。以下、順次見ていきたい。

①冒頭で、キリスト教国ではどこでも「さまよへる猶太人」伝説が残っているというのは、作品全体の見取り図を提示したものである。「伊太利でも、仏蘭西でも、英吉利でも、独逸でも、奥太利でも、西班牙でも」口碑が伝わっているというのは、後述の出現例から確認できる。なお、「伊太利」の例は本稿では言及しないが、後述⑩ Paul von Eitzen の話や、⑭の Rudolph Botoreus の記述中に見える。

②次の「グスタフ・ドオレの画は勿論、ユウジアン・スウもドクタア・クロリイも、これを小説にした」は、本書“The Wandering Jew”冒頭の“Gustave Doré’s marvellous illustrations to this wild legend” (p.1.この興奮させる伝説に取材したギユスタフ・ドレの驚くべき挿し絵)と、末尾の“the romances of Eugène Sue and Dr. Croly, founded upon the legend.” (p.30.この伝説に基づいた、ユージェーヌ・シューとドクター・クロリーの物語)を繋ぎ合わせたものである。

③「モンク・ルイズのあの名高い小説」、「ファイオナ・マクレオドと称したウィリアム・シヤアプ」への言及は本書に見えず、語り手が自身の知見を付加したものである。前者が *The Monk* 第2巻第1章に拠ることは、『芥川龍之介全集』第二巻(1995年12月岩波書店。以下『全集』と略)注解(酒井英行)の指摘する通りである。

④「さまよへる猶太人」の名が、「或はカルタファイルスと云ひ、或はアハスフェルスと云ひ、或はブタデウスと云ひ、或は又イサク・ラクエデムと云つてゐる」、職業も記録によ

って異なり、「イエルサレムにあるサンヘドリムの門番だつたと云ふものもあれば、いやピラトの下役だつたと云ふものもある。中には又、靴屋だと云つてゐるものもあつた」は、次の五つの説に拠っている。

1. “Cartaphilus, a porter of the hall, in Pilate’s service,” (p.7.ピラトの下僕で、法廷の門番だったカルタフィルス)。これは、Matthew Paris によって書写され、書き継がれた Abbey of S. Albans (セント・オールバンズ修道院) の年代記の綴じ込み帳に見られるもので、1228 年の Archbishop of Armenia Major (大アルメニアの大司教) の話に拠る。
2. “a native of Jerusalem, by name Ahasverus, by trade a shoemaker” (p.13.エルサレム生まれ、アハスヴェルスという名で、商売は靴屋)。これは、“Bishop of Schleswig” (p.12.シユレスヴィヒの司教) Paul von Eitzen の話に拠るもので、1547 年のこと⁶⁾。
3. “the old man the Jew, Ahasverus, wandering over the world, called by some Buttadaeus,” (p.20.世界中をさまよっているアハスヴェルス、何人かにはブッタデウスと呼ばれる年老いたユダヤ人)。ニュルンベルグの内科医レオナルド・ドルディウスにより、パラケルススのいんちき療法に対して書かれた小冊子で、ローテンブルグの学者で内科医のアンドレアス・リバヴィウスによりラテン語に翻訳され、増補されたものに拠る (原註に “Praxis Alchymiae. Francfurti, MDCIV[1604]. 8vo.” とある)。
4. “Isaac Laquedem, the Jew who had refused to permit our Blessed Lord to rest for a moment at his doorstep,” (p.21.主がちよつと戸口で休むのも許さなかった、ユダヤ人イサク・ラクエデム)。1640 年、ブリュッセルで二人の市民が出会った老人に関する話 (⑭の 3 参照) である。
5. “an officer of the Sanhedrim” (p.24.サンヘドリム [最高法院] の役人)。17 世紀終わり～18 世紀初めのこと (原註に “Calmet, Dictionn. de la Bible, t. ii. p. 472.” とある)。

5 によれば、サンヘドリムの “an officer” (役人) ということになるが、これが 1 の “a porter of the hall in Pilate’s service” (ピラトの下僕で、法廷の門番) と同一と考えれば、語り手が「サンヘドリムの門番」としたのもうなずける。

⑤本作では、最後の審判の日まで、永遠に漂浪を続けなければならない呪いを背負った原因について、

大体どの記録も変りはない。彼は、ゴルゴタへひかれて行くキリストが、彼の家の戸口に立止つて、暫く息を入れようとした時に、無情にも罵詈^{はり}を浴せかけた上で、散々打擲を加へさへした。その時負うたのが、「行けと云ふなら、行かぬでもないが、その代り、その方はわしの帰るまで、待つて居れよ」と云ふ呪^{のろひ}である。

とする。これは、以下の四つの説に拠っている。

1. Paul von Eitzen (前掲④の 2) の話。

As, then, Christ was led by, bowed under the weight of the heavy cross, He tried to rest a little, and stood still a moment; but the shoemaker, in zeal and rage, and for the sake of obtaining credit among the other Jews, drove the Lord Christ forward, and told Him to hasten on His way. Jesus obeying, looked at him, and said, ‘I shall stand and rest, but thou shalt go till the last day.’⁷⁾ (p.14.それから、キリストは後からついて歩きながら、十

字架の重みにくじけたので、少し休もうとして一瞬立ち止まった。しかし靴屋は、他のユダヤ人たちの中でよい評判を得ようとして、熱心に、怒って、主キリストを追い立て、道を急ぐように言った。イエスは、その言葉に従いながら、彼を見て、そして言った。「我は立ち止まり憩はん。されど汝は末期の日まで歩まん」

2. J.C.Bulenger の説 (原註に 'J. C. Bulenger, Historia sui Temporis, p. 357.' とある)。
when Christ, panting under the burden of the rood, sought to rest before his workshop (he was a cobbler), the fellow ordered Him off with acerbity. Thereupon Christ replied, 'Because thou grudgest Me such a moment of rest, I shall enter into My rest, but thou shalt wander restless.' (pp.19-20.十字架の重みにあえぎながら、キリストが仕事場(彼は靴の修理屋だった)の前で休もうとしたとき、そいつは辛辣な態度で追い払った。そこでキリストは返答した。「汝、かかる些かの憩ひすら惜しまば、我、己が安息に入らん。されど、汝、憩ふことなくさまよはん」)
3. なお、彼が「打擲を加へ」たのは、キリストが戸口に休んだときではなく、ピラトの法廷から出て行くときであった。④の1で挙げた話に、

When, therefore, the Jews were dragging Jesus forth, and had reached the door, Cartaphilus, a porter of the hall, in Pilate's service, as Jesus was going out of the door, impiously struck Him on the back with his hand, and said in mockery, 'Go quicker, Jesus, go quicker; why do you loiter?' and Jesus, looking back on him with a severe countenance, said to him, 'I am going, and you shall wait till I return.' (p.7.そこで、ユダヤ人達がイエスを引っ張っていき、ドアまでたどり着いたとき、ピラトの下僕で法廷の門番だったカルタフィルスは、ちょうどイエスがドアから出ていくところでしたが、不敬にもその背中を手で打ち、嘲りながらこう言いました。「もっと早く行け、イエス、早く行け。なんでそんなにのんびりしているんだ？」するとイエスは、厳しい顔つきで振り返りながらこう言いました。「いま行くところだよ。だがお前の方は、私が帰ってくるまで待つことになるう」)

4. ④の5で挙げた話にも次のようにある。

He declared that he had been an officer of the Sanhedrim, and that he had struck Christ as He left the judgment-hall of Pilate. (p.24.彼 [さまよえるユダヤ人] は、自分がサンヘドリズムの役人であり、キリストがピラトの法廷を出て行くときに彼を叩いたと断言した)

本作では、キリストへの罵詈雑言と打擲を同時の出来事とすることで、「さまよえるユダヤ人」の無慈悲さを強調している。なお、本作でのキリストの呪い、「行けと云ふなら、行かぬでもないが、その代り、その方はわしの帰るまで、待つて居れよ」は、上記3の "I am going, and you shall wait till I return." に拠ったと思われる。

⑥本作では、「この後、パウロが洗礼を受けたのと同じアナニアスの洗礼を受けて、ヨセフと云ふ名を貰つた」とする。これは、④の1の話で、

After Christ's death, when the Catholic faith gained ground, this Cartaphilus was baptized by Ananias (who also baptized the Apostle Paul), and was called Joseph. (pp.7-8.キリスト

の死後、カトリックの信仰が地歩を得たとき、このカルタフィルスはアナニヤス（使徒パウロにも洗礼を施した）から洗礼を受けて、ヨセフと呼ばれました）

とあるのに拠る（以下、本作にならって、「さまよえるユダヤ人」を「ヨセフ」と呼ぶことにする）。

⑦「近頃の事」として、「千七百二十一年六月二十二日、ミウニツヒの^{まち}市に現れた事は、ホオルアイエル[®]のダツシエン・ブウフの中に書いてある」は、“On the 22nd July, 1721, he appeared at the gates of the city of Munich.”（p.24.1721年7月22日、彼はミュンヘンの市街のすぐ近くに現れた）と、その原註6“Hormayr, Taschenbuch, 1834, p. 216.”に拠る。Julyを「六月」としたのは、Juneと勘違いしたためか。本書“The Wandering Jew”では、最古の出現例から順次時代を下っていく方法が取られているが、本作では、最後の審判の日まで呪いが解けない証拠として、まず最近の出現例を述べ、次いで最古の例から順次時代を下るやり方を取っている。なお、本書には1818、1824、1830年の出現例があるが、これはさまよえるユダヤ人を騙る者、そう狂信している者とされている[®]ので、本作では除外したのであろう。

⑧続いて、最古の例として挙げられた「マシウ・パリスの編纂したセント・アルバンスの修道院の年代記に出てゐる記事」とは前掲④の1のことで、“The earliest extant mention of the Wandering Jew, is to be found in the book of the chronicles of the Abbey of S. Albans, which was copied and continued by Matthew Paris.”（p.5.さまよえるユダヤ人に関する最も古い言及で現存するものは、マシユー・パリスによって書写され、書き継がれたセント・オールバンズ修道院の年代記の綴じ込み帳に見出すことができる）に対応する。「大アルメニアの大僧正が、セント・アルバンスを訪れた時に、通訳の騎士が大僧正はアルメニアで屢々「さまよへる猶太人」と食卓を共にした事があると云つたさうである」とは、“a certain Archbishop of Armenia Major came on a pilgrimage to England”（p.5.ある大アルメニアの大司教が巡礼をしにイングランドに来た），“On his arrival, he went to S. Albans,”（p.6.イングランドに着いた大司教は、セント・オールバンズに行った）に続く次の個所に拠っている。

In the course of conversation he was asked whether he had ever seen or heard any thing of Joseph, a man of whom there was much talk in the world, who, when our Lord suffered, was present and spoke to Him, and who is still alive, in evidence of the Christian faith; in reply to which, a knight in his retinue, who was his interpreter, replied, speaking in French, ‘My lord well knows that man, and a little before he took his way to the western countries, the said Joseph ate at the table of my lord the Archbishop in Armenia, and he has often seen and held converse with him.’（p.6.会話の途中、大司教は、ヨセフという人について何か見たり聞いたりしたことはなかったか、と尋ねられた。ヨセフこそ、彼について世界中で多くのことが語られ、わが主が苦しんでいたときにそこに居て話しかけ、そしてキリスト教の信仰の証人として今もまだ生きている人である。大司教の従者で通訳だった騎士は、フランス語でこう返答した。「我が主人はその男のことをよく知っています。主人が西洋諸国に旅立つ少し前、件のヨセフは我が主アルメニ

アの司教と食卓を共にしました。これまでしばしばヨセフと会って、話したものです」)

ヨセフがさまよえるユダヤ人の別名であることは、⑥にある通りである。

⑨「次いでは、フランドルの歴史家、フィリップ・ムスクが、千二百四十二年に書いた、韻文の年代記の中にも、同じやうな記事が見えてゐる」は、⑧の司教の話に続く、

Much about the same date Philip Mouskes, afterwards Bishop of Tournay, wrote his rhymed chronicle (1242), which contains a similar account of the Jew, derived from the same Armenian prelate: (p.9.だいたい同じ頃、後にトゥルネーの司教となったフィリップ・ムスクが、韻文の年代記(1242年)を書いているが、そこには、同じアルメニアの高位聖職者に由来した、そのユダヤ人についての類似した話が含まれている)に拠る。‘Tournay’は井上十吉『井上英和大辞典』(大正四年九月至誠堂書店。披見本は同年十月二十五日七版)に「tournay [略] (もと白耳義 Tournay にて製造せし)」云々とあり、ベルギーの地名と分かる。ブリュッセルの南西 80km に位置するベルギーの都市で、確かにフランドル地方に入るから、Philip Mouskes を「フランドルの歴史家」としたのは正しい。

⑩十三世紀以前の例に続いて、十六世紀以降の出現例が紹介される。「千五百五年になると、ボヘミアで、ココトと云ふ機織りが、六十年以前にその祖父の埋めた財宝を彼の助けを借りて、発掘する事が出来た」は、

as assisting a weaver, Kokot, at the royal palace in Bohemia (1505), to find a treasure which had been secreted by the great-grandfather of Kokot, sixty years before, at which time the Jew was present. (p.10. 1505年、ボヘミアの王宮で、機織りのココトがその曾祖父によって六十年前に隠された宝物を見つけるのを手助けした。六十年前、そのユダヤ人はそこに居たからである)

に拠る。“great-grandfather”を「祖父」としたのは、“grandfather”と勘違いしたためか。

⑪「そればかりではない。千五百四十七年には、シユレスウイツヒの僧正パウル・フォン・アイツェンと云ふ男も、ハムブルグの教会で彼が祈禱をしてゐるのに出遇つた」は、前掲④の2の Paul von Eitzen の話に拠る。

Paul von Eitzen, [...] related as true for some years past, that when he was young, having studied at Wittenberg, he returned home to his parents in Hamburg in the winter of the year 1547, and that on the following Sunday, in church, he observed a tall man, with his hair hanging over his shoulders, standing barefoot during the sermon, over against the pulpit, listening with deepest attention to the discourse, and, whenever the name of Jesus was mentioned, bowing himself profoundly and humbly, with sighs and beating of the breast. (p.12.パウル・フォン・アイツェンは、[略] 数年来、真実として次のように物語っている。彼が若い頃、ヴィッテンベルグで学んでいたとき、1547年の冬にハンブルクの両親の許に帰省した。次の日曜日、教会で、髪を肩から垂らした背の高い男を見た。彼は説教の間裸足で立ち続け、説教壇の真向かいでこれ以上ないほど注意深く話に聞き入っており、そして、イエスの名が出て来る時はいつも、ため息

をつき胸を叩きながら、恭しく謙虚に頭を垂れた)

⑫「それ以来、十八世紀の初期に至るまで、彼が南北両欧に亘つて、姿を現したと云ふ記録は、^{はなはだ}甚多い。最も明白な場合のみを挙げて見ても」は、以下に述べる多くの例を概観したもので、“Such are the principal notices of the Wandering Jew which have appeared.”

(p.26.これらが、出現したさまよえるユダヤ人に関する主な情報である)などを踏まえている。本書で言及された出現例で、語り手の省いたものもいくつかある。

⑬続く「千五百七十五年には、マドリッドに現れ、千五百九十九年には、ウインに現れ、千六百一年にはリウベック、レヴェル、クラカウの三ヶ所に現れた」は、“Dated, Revel, August 1st, 1613./ “D. W./ “D./ “Chrysostomus Dudulceus,/ “Westphalus.” (p.18.1613年8月1日、レーヴェルにて。D.W./ D./クリソストムス・ドウドウロエウス、/ウェストファルス)による以下の三つの記述をまとめたものである。

1. “In the year 1575, the Secretary Christopher Krause, and Master Jacob von Holstein, [...] confirmed with solemn oaths, that they had come across the same mysterious individual at Madrid in Spain, ” (p.17.1575年、秘書クリストファー・クラウゼとヤコブ・フォン・ホルシュタイン師は [略] スペインのマドリッドで、[パウル・フォン・アイツェンがハンブルクで見たのと] 同じ謎めいた人に出くわしたと、厳粛に誓った)。

2. “In the year 1599, in December, a reliable person wrote from Brunswick to Strasburg that the same mentioned strange person had been seen alive at Vienna in Austria, ” (p.17.1599年12月、ある信頼できる人物は、ブラウンシュバイク [ドイツ中北部の都市] からストラスブル [フランス北東部、アルザス地方の中心都市] に出した手紙の中で、上述と同じ奇妙な人物がオーストリアのウィーンでびんびんしているのが目撃されたと書いた)。

3. “This Ahasverus was at Lubeck in 1601, also about the same date in Revel in Livonia, and in Cracow in Poland. ” (p.18.このアハスヴェルスは、1601年にリューベックにいたし、同じ時期にリヴォニア [バルト海東岸の地域] のレーヴェル [エストニアの首都タリンの旧称] に、またポーランドのクラクフにもいた)。

⑭「ルドルフ・ボトレウスによれば、千六百四年頃には、パリに現れた事もあるらしい、それから、ナウムブルグやブラツセルを経て、ライプツイツヒを訪れ、」は、以下の四個所に拠っている。

1. “In 1604 he seems to have appeared in Paris. Rudolph Botoreus says under this date:” (p.18.1604年、彼はパリに現れたようである。ルドルフ・ボトレウスはこの年代のこととして、次のように述べている)。原註に“R.Botoreus,Comm.Histor.lii.p.305.”とある。

2. “He is said to have appeared in Naumburg, but the date is not given;” (p.21.彼はナウムブルグに現れたそうだが、その時期は不明である)。原註に“Mitternacht, Diss. in Johann. xxi. 19.”とある。

3. “In the year 1640, two citizens, living in the Gerberstrasse, in Brussels, were walking in the Sonian wood, when they encountered an aged man, whose clothes were in tatters and of an antiquated appearance.” (p.21.1640年、ブリュッセルのゲルバーシュトラッセに住む二人の市民が、ソニアン^{ソニア}の森を散歩していた時、年老いた男と出くわした。彼の服はぼろぼ

ろで、時代遅れに見えた)。

4. “In 1642 he is reported to have visited Leipzig.” (p.21.1642 年、彼はライプチヒを訪れたと報告されている)。

⑮続く、「千六百五十八年には、スタンフォードのサムエル・ウォリスと云ふ肺病やみの男に、赤サルビアの葉を二枚に、羊蹄^{ブラッドワート}の葉を一枚、麦酒にまぜて飲むと、健康を回復すると云ふ秘法を教へてやつたさうである」は、以下のように“Peck's “History of Stamford”” (p.21.ペックの『スタンフォードの歴史』) に拠った記述である。“Upon Whitsunday, in the year of our Lord 1658,[...] one Samuel Wallis, of Stamford, who had been long wasted with a lingering consumption, was sitting by the fire,” (pp.21-22.1658 年の聖霊降臨日、[略] 長らく、しつこい肺病で衰弱していたスタンフォードのサミュエル・ウォリスという人が、暖炉の傍に座っていた)。彼は、礼儀正しく、背が高く威厳のある老人の訪問を受け、小さなカップ一杯のビールを振る舞う。すると老人は、そのお返しに肺病の治療法を教えてくれた。

‘I will tell thee what thou shalt do; and, by the help and power of Almighty God above, thou shalt be well. Tomorrow, when thou risest up, go into thy garden, and get there two leaves of red sage, and one of bloodworte, and put them into a cup of thy small beere. Drink as often as need require, and when the cup is empty fill it again, and put in fresh leaves every fourth day, and thou shalt see, through our Lord's great goodness and mercy, before twelve days shall be past, thy disease shall be cured and thy body altered.’ [...] the patient got well within the given time, (pp.22-23.「我、汝のなすべき事を語らん。天なる全能の神の御力により、汝、健やかとならん。明日、起床ののち庭へ行き、レッド・セージの葉二枚、ブラッドワートの葉一枚を採り、小さき器に入れ、ビールを注ぐべし。それを欲するがままに飲み、空となれる時は再び満たし、四日ごと新鮮なる葉と換へよ。さすれば見よ、主の大いなる御高德と御慈悲とにより、十二日の過ぐる前に、病は癒え、身体革まるべし。」[略] その患者(ウォリス)は所定の期間内に治った)。

‘sage’ はサルビア属の植物の総称。前掲『井上 英和大辞典』に「(学名 *Salvia*)、撒爾維亞^(サルバ)」とある。‘bloodworte’ はギンギシ属など、根や葉の赤い植物の総称。『井上 英和大辞典』に「【植】羊蹄^(ギシ)属の一種」とある⁽¹⁰⁾。タデ科の多年草で、学名は「*Rumex japonicas*」、ぎしぎし 一名しぶくさ 羊蹄(牧野富太郎校訂・東京博物館研究会編纂『植物図鑑』明治四十一年十月北隆館・参文舎。披見本は同年十一月再版)。

⑯「次いで、前に云つたミュウニツヒを過ぎて、再英吉利に入り、ケムブリツヂやオックスフォードの教授たちの質疑に答へた後、丁抹^{でんまあく}から瑞典^{すゐでん}へ行つて、遂に踪跡がわからなくなつてしまつた」の「前に云つた」とは、⑦の 1721 年の出現例をいう。続く記述は、

About the end of the seventeenth century, or the beginning of the eighteenth, an impostor, calling himself the Wandering Jew, attracted attention in England,[...] Oxford and Cambridge sent professors to question him, and to discover the imposition, if any.

(pp.24-25.十七世紀の終わりか、十八世紀の初め頃、自分でさまよえるユダヤ人と名乗るペテン師が、イングランドで人々の注意を引きつけた。[略] オックスフォードとケンブリッジは、教授たちを送り込んで彼に質問させ、もしペテンがあれば暴こうとした)。

に拠り、さらに“he shortly after appeared in Denmark, thence travelled into Sweden, and vanished.” (p.25.すぐ後に彼はデンマークに現れ、そこからスウェーデンに旅して、そこで消えてしまった) に拠っている。次の「爾来、今日まで彼の消息は、杳としてわからない」はまとめの言葉である。

⑩こうした出現例を踏まえた上で、語り手は二つの疑問を提起する。第一は、「殆どあらゆる基督教国に、姿を現した」「さまよへる猶太人」が、十六世紀の日本にも現れのではないか、ということ。これについて語り手は、イスラム教圏で目撃された例を挙げ、日本に来ていてもおかしくないと推論する。すなわち、

デルプロオのビブリオテック・オリアンタルを見ると、「さまよへる猶太人」は、十六世紀の初期に当って、ファディラの率あるアラビアの騎兵が、エルヴァンの市を陥れた時に、その陣中に現れて、Allah akubar (神は大いなるかな) の祈禱を、ファディラと共にしたと云ふ事が書いてある。既に彼は、「東方」にさへ、その足跡を止めてある。

これは、本書の以下の記述に拠っている。

Curiously enough, we next hear of him in the East,[...]Early in the century he appeared to Fadhilah, under peculiar circumstances. / After the Arabs had captured the city of Elvan, Fadhilah, at the head of three hundred horsemen, pitched his tents, late in the evening, between two mountains. Fadhilah, having begun his evening prayer with a loud voice, heard the words “Allah akbar” (God is great) repeated distinctly, and each word of his prayer was followed in a similar manner. (p.10.まったく興味深いことに、我々は次に東洋で彼 [さまよえるユダヤ人] のことを耳にする。[略] その世紀の初期、一風変わった状況下で、彼はファディラの前に現れた。 / アラブ人がエルヴァンの市を占領した後、三百の騎兵の頭であるファディラは、夕方遅くに、二つの山の間に天幕を張った。ファディラが、大声で夕べの祈りを唱え始めたとき、「Allah akbar」(神は偉大なり) という言葉がはっきりと繰り返されるのを聞いたが、彼の祈の一語ごとに、同じように繰り返して唱えられた)。

驚いたファディラの呼びかけに姿を現した老人は、次のように語った。“I am here by command of the Lord Jesus, who has left me in this world, that I may live therein until He comes a second time to earth.” (p.11.私は、私をこの世に残した主イエスの命により、ここにおります。主が再びこの世に帰って来るまで、ここで暮らすために)。

文中の“Early in the century”とは、この話が⑩の1505年の次にあることから、十六世紀初期を指す。出典は、原註に“Herbelot, Bibl. Orient. iii. p. 607.”とあるように、d’Herbelotの *Bibliothèque Orientale* に拠るものであり⁽⁴⁾、本作の語り手の説明と一致する。さまよえるユダヤ人が各地で目撃され、十六世紀初期にはイスラム教圏でも目撃されたとすれば、

数十年後、キリシタン時代の日本に出現しても不思議ではない。『煙草』（前掲）で、「南蛮の神が渡来すると同時に、南蛮の悪魔が渡来すると云ふ事」を「至極、当然な事がら」として、悪魔がフランス上人について日本に来たとする芥川であれば、その船に「さまよへる猶太人」も同船していたという発想は容易であろう。これが本作の独自性の第一である。

⑫二つの疑問（⑰⑱参照）を提示した後、「さまよへる猶太人」を取扱った文献の数は、非常に多い」というのは一般的な知識かも知れないが、本書末尾に、

I began this article intending to conclude it with a bibliographical account of the tracts, letters, essays, and books, written upon the Wandering Jew; but I relinquish my intention at the sight of the multitude of works which have issued from the press upon the subject; (p.30.私はこの章を、さまよえるユダヤ人について書かれた小冊子や書簡、論文、書物に関する文献学的記述で締めくくるつもりで書き始めた。しかし、このテーマの出版物に由来する大量の著作を見て、その意図を放棄した)

云々とあるのをういたものであろう。本作末尾の「自分としても、如上の記述に関する引用書目を挙げて、聊いさゝかこの小論文の体裁を完全にしたいのであるが、生憎さうする丈の余白が残つてゐない」も、これを踏まえていよう。なお、『〈さまよへる猶太人〉草稿』（『芥川龍之介資料集1』所収、1993年11月山梨県立文学館）冒頭に「et littérairesとかの中にあるビブリオグラフィによつて、調べて頂きたい。古来この伝説に關した記録は、殆ど汗牛充棟と云ふ語をむなしく虚いさゝかしない位、沢山ある」の「et littéraires」は、本書末尾で言及される“those[lists] to be found in[...]; also in the article by M. Mangin, in “Causeries et Méditations historiques et littéraires,” Paris, Duprat, 1843;” (p.30.また、『歴史的・文学的な随想と冥想録』（パリ、デュブラ、1843年）におけるM.マンガンの論文〔略〕中に見出されるそれら〔文献目録〕からの引用であろう。

⑲次いで語り手は、第二の疑問、すなわち、キリストを迫害した人々の中で、なぜヨセフだけが呪いを負ったのかについて、「偶然手に入れた文禄年間」の「古文書」からその答えを導き出す。ここで語り手は、フランススコ・ザビエルと邂逅した「さまよへる猶太人」の服装について、「ペツクがその著「ヒストリイ・オヴ・スタンフオオド」の中で書いてゐる」として次のように紹介する。

彼の上衣は紫である。さうして腰まで、ボタンがかゝつてゐる。ズボンも同じ色で、やはり見た所古くはないらしい。靴下はまつ白であるが、リンネルか、毛織りか、見当がつかなかつた。それから髯も髪も、両方とも白い。手には白い杖を持つてゐた。

これは、⑮で挙げた文献を利用した次の個所に拠っている。

His dress has been minutely described by honest Sam. His coat was purple, and buttoned down to the waist; “his britches of the same couler, all new to see to;” his stockings were very white, but whether linen or jersey, deponent knoweth not; his beard and head were white, and he had a white stick in his hand. (p.23.彼の服装は、正直なサム〔サミュエル・ウォリス〕によつて詳細に描かれている。上着は紫色で、腰までボタンがかか

っていた。「半ズボンも同じ色にて、すべて新らしく見ゆ」。靴下は真っ白だったが、リンネルか毛織物か、サムにはわからなかった。ヒゲと髪は白く、手に白い杖を持っていた)

以上 19 個所のうち、「さまよへる猶太人」が日本に来たとする⑩や、キリストへの罵詈雑言と打擲を併せた⑤は、比較的大きな改変といえる。しかしその他は、記述の順序を入れ替えたり、複数個所を適宜まとめたり、簡略化したりしているものの、基本的には本書 “The Wandering Jew” をなぞっていると見てよい。

三

主題に関わるような大きな改変は、語り手の提起する第二の疑問、すなわち、キリストを迫害し、嘲弄した者は数多かったのに、なぜヨセフだけが呪いを背負わなければならなかったのか、の回答にあった。まず、本作後半のフランシスコ・ザビエルとヨセフの対話について、考えてみたい。

これを記録した「古文書」には、「元来それがしは、ヨセフと申して、エルサレムに住む靴匠くつくりでござつたが」とあるが、これは前掲⑥・⑧・④の 2 等から得られる。「眼のあたりに御受難の御有様を拝し」たこと、「御主おんあるじがピラト殿さばきの裁判を受けられるとすぐに、一家のものどもを戸口へ呼び集めて、勿体なくも、御主おんあるじの御悩みを、笑ひ興じながら、見物した」こと、「折から通りかかった彼の戸口に足を止めて、暫く息を休めようとした」「キリスト」を、ヨセフが「多くの人々の手前、祭司たちへの忠義ぶりが見せようござつたによつて、」

片手に子供を抱きながら、片手に「人の子」の肩を捕へて、ことさらに荒々しくこづきまはした。——「やがては、ゆるりと礎柱はりきにかかつて、休まる体ぢやなど悪口し、あまつさへ手をあげて、打擲さへしたものである。」／すると、キリストは、静かしらに頭をあげて、叱るやうにヨセフを見た。彼が死んだ兄に似てゐると思つた眼で、厳おごそかにぞつと見たのである。「行けと云ふなら、行かぬでもないが、その代り、その方はわしの帰るまで、待つて居れよ。」——キリストの眼を見ると共に、彼はかう云ふ語ことばが、熱風よりもはげしく、刹那に彼の心を焦がすやうな気もちがした。[略]ヨセフは、「この呪しんじが心耳しんじにとどまつて、ゐても立ても居られぬやうな気になつたのであらう。あげた手が自ら垂れ、心頭おのづかにあつた憎しみが自ら消えると、彼は、小供を抱いた儘、思はず往来に 跪ひざまづいて、爪を剥がしてゐるキリストの足に、恐る恐る唇をふれようとした。が、もう遅ひ。[略]ヨセフは眼に涙を浮べながら、腕の小供を何時か妻に抱きとられたのも忘れて、何時までも跪いた儘、動かなかつた。

………

以上は、⑤で挙げた本作の記述を、ヨセフの口から詳しく語り直したものである。この典拠は、主に、⑤の 1 で引用した Paul von Eitzen の話の直前の箇所、

Then the man answered, that he had lived in Jerusalem at the time of the crucifixion of

Christ, whom he had regarded as a deceiver of the people and a heretic; he had seen Him with his own eyes, and had done his best, along with others, to bring this deceiver, as he regarded Him, to justice, and to have Him put out of the way. When the sentence had been pronounced by Pilate, Christ was about to be dragged past his house; then he ran home, and called together his household to have a look at Christ, and see what sort of a person He was. / “This having been done, he had his little child on his arm, and was standing in his doorway to have a sight of the Lord Jesus Christ. (pp.13-14.それから、その男 [さまよえるユダヤ人] は次のように答えた。自分はキリストの磔刑の際、エルサレムに住んでいたが、キリストについて、人々をたぶらかす詐欺師、異端者と考えていた。彼はキリストをその眼で見た。そして、他の人々と一緒に、この詐欺師 (と彼は思っていた) に正義をもたらし、排除しようと全力を尽くした。ピラトによって判決が宣告されたあとのすぐのことで、キリストはちょうど彼の家の前を連れて行かれるところだった。そこで彼は家に駆け戻り、どんな人かキリストを一目見ようと、一家全員を一斉に呼んだ。 /これが済むと、小さい子を片腕に抱き、主イエス・キリストを一見しようと戸口に立っていた)

と、これに続く⑤の1の引用箇所、さらにその後の、

At these words the man set down the child; and unable to remain where he was, he followed Christ, and saw how cruelly He was crucified, how He suffered, how He died. As soon as this had taken place, it came upon him suddenly that he could no more return to Jerusalem, nor see again his wife and child, but must go forth into foreign lands, one after another, like a mournful pilgrim. (pp.14-15.これらの言葉を聞いて、その男は子供を下に降ろした。そして、自分のいた場所にとどまることができず、キリストについて行った。そして、どんなに残酷に磔にされたか、どんなに苦しんだか、どのように死んだかを見た。これが起こった後直ちに、次のような思いが突如彼の胸に浮かんだ。自分はもはやエルサレムに戻ることもできないし、二度と妻や子供に会うこともできない、その代わり、悲しみに満ちた巡礼のように、次から次へと見知らぬ土地を旅せねばならない、と)

という一連の個所に拠っている。これに加え、⑤の3に挙げたように、ピラトの法廷から出て行くイエスの背中をカルタフィルスが叩き、嘲ったこと、それを聞いたイエスが、前述のように “looking back on him with a severe countenance, said to him, ‘I am going, and you shall wait till I return.’” と答えたことも用いられている。さらに、⑤の2の引用箇所に続く、“At once frantic and agitated he fled through the whole earth,” (p.20.すぐに心がかき乱され、気が狂ったようになって、彼は世界中逃げ回った) も参照されたであろう。

このように本作では、「一家のものどもを戸口へ呼び集め」「片手に子供を抱きながら」「見物」したことや、イエスの言葉がヨセフの「心を焦がすやうな気もちがし」、「ゐても立ても居られぬやうな気」になった心理状態等、細部に涉って “The Wandering Jew” を生かしていることが確認できる。

一方、相違点としてはまず、キリストの「悲しみも悦びも超越した、不思議な表情を

湛へ」た「青く澄んだ御眼」が、教えを信じない「ヨセフの心にさへ異常な印象を与へた」点が挙げられる⁽¹²⁾。ヨセフによれば、「大方死んだ兄と、よう似た眼をしてみられたせい」か、「何となくなつかしい気が起つた」という。このように、キリストに親近感を抱いていたにも関わらず、「多くの人々の手前、祭司たちへの忠義ぶりが見せうござつたによつて」（これは前掲⑤の1の“for the sake of obtaining credit among the other Jews, ”に拠っている）とあるように、虚栄心・利己心から周囲に迎合したヨセフは、キリストを罵り打擲するのである。ところが、典拠である Paul von Eitzen の話では、ヨセフはキリストを詐欺師と見て正義の鉄槌を下そうとし、他のユダヤ人の中で目立とうとことさら熱心に追い払っているのであり、キリストには全く親近感を抱いていない。これは重要な改変である。

また、キリストの言葉に撃たれたヨセフが、その足に接吻しようとしたものの時既に遅く、「五六歩彼の戸口を離れてゐ」たので、皮肉にも周囲はそれを「キリストに対する嘲弄だと解釈した」ことも、Paul von Eitzen の話には見えない。ヨセフがいかにも「後悔」しても、もはや取り返しのつかないことを明示するねらいであろう。この足への接吻は、本作で、「キリストが十字架にかけられた時に、彼を窘めたものは、独りこの猶太人ばかりではない。或ものは、彼に荆棘の冠を頂かせた。或ものは、彼に紫の衣を纏はせた。[略] 石を投げ、唾を吐きかけたものに至つては、恐らく数へきれない程多かつたのに違ひない」とある個所の典拠と考えられる Mark xv. 17-20.（「マルコ伝」15章17-20。『全集』注解に指摘）、

And they clothed him with purple, and platted a crown of thorns, and put it about his head, And began to salute him, Hail, King of the Jews! And they smote him on the head with a reed, and did spit upon him, and bowing their knees worshipped him. And when they had mocked him, they took off the purple from him, and put his own clothes on him, and led him out to crucify him. (彼に紫の袍をきせ 棘にて冕を編て冠しめたり 斯て曰けるは、ユダヤ人の王安かれ また葦を以て其首を撃 かつ唾し 跪きて拝しぬ 嘲弄し畢て紫の衣をはぎ 故の衣をきせて十字架に釘んとて曳往しが)

から、“bowing their knees worshipped him”（跪きて拝しぬ）を用いたものであろう。原文の嘲弄行為を、真実の悔改（repentance）の表明へと改変した点に工夫が見られる。

さらに、Paul von Eitzen の話では、キリストの言葉を聞いたヨセフが、抱いていた子供を下に降ろしてその後について行くのだが、本作では「腕の小供を何時か妻に抱きとられたのも忘れて、」とすることで、ヨセフの「茫然」自失ぶりを強調している。

以上のように本作のヨセフは、「御主を辱めた罪を」「知ればこそ、呪もかかつたのでござる。罪を罪とも思はぬものに、天の罰が下らうやうはござらぬ。[略] 但し罰をうければこそ、贖ひもあると云ふ次第ゆゑ、やがて御主の救拔を蒙るのも、それがしひとりにはきわまりました」として、罪→罰→贖ひ→救いという、悔改（repentance）による救いを確信している。

しかし、こうしたヨセフの思いは“The Wandering Jew”にも見えるものであつた。Paul von Eitzen の話に拠れば、

“He believes that it is God's purpose, in thus driving him about in miserable life, and preserving him undying, to present him before the Jews at the end, as a living token, so that the godless and unbelieving may remember the death of Christ, and be turned to repentance. For his part he would well rejoice were God in heaven to release him from this vale of tears. (p.15.彼は信じている。神は、こんな風に惨めな人生に自分を追いやり、死なせずにおいて、最後に生き証人としてユダヤ人たちの前に自分の姿を見せることを意図しているのだ、そうすることで、神を否定し信じない者がキリストの死を思い出し、悔改ができるように、と。彼としては、もし天に在す神がこの涙の谷〔悲しみに満ちた浮世〕から自分を自由にしてくれるのであれば、まことに嬉しく思うだろう)

he never took more than two skillings (4¼d.), and at once distributed it to the poor, as token that he needed no money, for God would provide for him, as he rued the sins he had committed in ignorance. / “During the period of his stay in Hamburg and Dantzic he was never seen to laugh.[...] He gladly listened to God's word, or heard it spoken of always with great gravity and compunction, and he ever revered with sighs the pronunciation of the name of God, or of Jesus Christ, (p.16.彼は2スキリング (4.25 ドル) より多くは決してうけとらず、しかもそれを直ちに貧しい人々に分け与えた。神が自分を養ってくれるのだから、お金は必要ではないというしるしとして、また、何も知らずに犯した罪を後悔していたので。 / ハンブルクとダンツィヒに滞在していた期間を通して、彼が笑うのを見た人は誰もいなかった。[略] 彼は喜んで神の言葉を聞き、或いは、それが話されるときはいつも極めて真剣に、悔恨を以て聞いた。そして、神やイエス・キリストの名を口にするときにはいつも、ため息をつき畏敬して言った)

キリストを嘲弄したヨセフは、今はその罪を後悔し、深い悔恨の中にいる。不信心者を悔い改めさせるべく、神の意図した生き証人として、世界中に姿を現しているのである。大アルメニアの大司教の話 (④の1・⑧参照) にも、

And all this he relates without smiling or levity of conversation, as one who is well practised in sorrow and the fear of God, always looking forward with fear to the coming of Jesus Christ, lest at the Last Judgment he should find Him in anger whom, when on His way to death, he had provoked to just vengeance. [...] He refuses all gifts that are offered him, being content with slight food and clothing. He places his hope of salvation on the fact that he sinned through ignorance,” (pp.8-9.そして彼は、見聞したこれらすべてについて、微笑したり軽々しく喋ったりすることはありません。なぜなら、悲しみと神への畏れの念が習い性となっている彼は、常にイエス・キリストの再臨を、畏れを抱きつつも期待しているからです。最後の審判のときに、キリストが彼を怒っていないとわかるように、と。キリストが死へと向かう途で、彼はまさにキリストに復讐の念を引き起こさせたのですから。[略] 彼は、差し出された贈り物すべてを拒み、わずかな食べ物と衣服で満足しています。無知ゆえに罪を犯したという事実に、救済の望みを掛けています)

とある。現在のヨセフが罪を自覚し、禁欲的な生活を続けていることは明らかである。

Paul von Eitzen によれば、ヨセフに変化が訪れたのはキリストの言葉を聞いた後であり、“At these words the man set down the child; and unable to remain where he was, he followed Christ,” (本稿 12 頁) とされる。また、J.C.Bulenger によれば “At once frantic and agitated” (同頁) とされる。つまり典拠では、前述のようにキリストを罵詈雑言し打擲する行為自体に嘘はなく、“he sinned through ignorance” とあるように、キリストと知らぬ無知ゆえの罪であった。一方本作では、キリストに親近感を抱いていたヨセフは、自身の罵詈雑言を心にもないものと自覚していた。これが本作独自の工夫である。すなわち、キリストの言葉に撃たれた後で罪を自覚した点は共通するが、本作ではその前に、本心では親近感を抱いていながら、周囲に迎合する余りそれを裏切る行動に走ってしまい、その齟齬をキリストが見抜いて呪いをかけた、としたのである。簡単に言えば、典拠のヨセフに本心と行動の齟齬はなかったが、本作のヨセフには齟齬があった。キリストはそれを叱責したのである。

第二の問に対する端的な答えとして、罪を自覚したからだ、というのが強調されるが⁽¹³⁾、確認したように、それは典拠にも見られるものであった。従って本作では、その言葉に撃たれて直ちに罪を自覚したとする、キリストの神性が主題なのではない。反対のヨセフの側の問題、すなわち、本心では親近感を抱いていたのに、周囲に迎合して酷薄な行動を取ってしまった、その弱さを主題としたのである。

ヨセフのように、本心では親近感を抱いていながら周囲に迎合してしまう主人公に、『父』(大正五年五月『新思潮』)の能勢五十雄があった。修学旅行に行く息子を人知れず見送りに来た父を、能勢は友人たちの手前、「ロンドン乞食」と酷評する⁽¹⁴⁾。また、内面と外面の齟齬ということであれば、『手巾』(大正五年十月『中央公論』)の西山夫人があった。息子の死を平静に報告しながら、しかしテーブル下で激しく震えるその手は、彼女の心痛ぶりを遺憾なく示している。芥川には、本作以前から同様の関心が存していた。

なお本稿で、「罪を罪と知る」がゆえに「罰と贖ひ」とが下るとした、語り手の「答の当否を穿鑿する必要」はないが、「暫く」私見を述べておきたい。新約聖書の世界では、キリストの呪いを受けた者は誰でも、罪の自覚の有無に関係なく、ヨセフと同じ運命に陥ったと考えられる。これは、キリストの行った奇跡(パンの分量を増やす、水を葡萄酒に変える、難病を癒す等)が、そこに居合わせた人々の内面と無関係に成立したのと同様であろう。キリストを「嘲弄」した者は確かに多かったが、やりすぎてキリストに厳しく咎められ、呪いをかけられた者は「彼ひとり」だったのである。しかし本作は、これをキリスト側の問題とせず、嘲弄したヨセフ側の心の問題に転換した。つまり、本心と行動の齟齬がなければ、キリストに見咎められ、呪いをかけられることもなく、従って世界をさまようことにはならなかったろう、というのである。典拠に比べ、本作のヨセフに救済の確信が強いように見えるのは、問題がヨセフの心の側にあったからであろう。以上のように、改変自体は些細なものだったが、つい周囲に媚びてしまうような心理を主題とした点に、近代文学的な特徴が看取される。

以上、本作の主題について“*The Wandering Jew*”と対照しながら考察した。この他、フランス人上人と「さまよへる猶太人」との間に交わされた、「メルジナと云ふ人魚」以下の四つの話も、*Curious Myths of the Middle Ages* に拠っている。

まず、「その頃はルジニオンとは云はず、ルジニアと云うて居りましたが、そこに人魚の建てた城がござつて、メルジナはレイモンと云ふ侍と一しよに、仲よく棲んで居りました」は、本書第19章“*Melusina*”の

Melusina continued to extend the castle, and strengthen its fortifications, till the like was not to be seen in all the country round. On its completion she named it after herself Lusinia, a name which has been corrupted into Lusignan, which it bears to this day. (p.475.メルジナはその城を拡張し続け、同様のものが国中に見られなくなるまで防御の増強工事をした。それが完了すると、彼女は自分の名にちなんでルジニア城と名付けた。その名は訛ってルジニャンとなり、今日まで続いている)

に拠る。「レイモン」とは“*a Count de la Forêt*” (フォレの伯爵) の“*youngest son Raymond*” (p.471) のこと。彼がイノシシ狩りの時に“*Colombiers*” (p.472) の森で出遭った三人の乙女の一人がメルジナで、レイモンはすぐに結婚の約束を交わす。“*she was a water-fay of great power and wealth.*” (p.474. 彼女は偉大なる力と富を持つ水の妖精だった)。

His she consented to be, but subject to one condition, that her Saturdays might be spent in a complete seclusion, upon which he should never venture to intrude. (p.474.彼女は結婚に同意したが、一つの条件に従わせた。それは、土曜日ごとに完全に一人ぼっちで過ごせるように、その日は決して無理に押しかけない、ということであった)

というのも、その日は、“*from her waist downwards terminating in a scaly fish-tail enamelled blue and white.*” (p.478.彼女の腰より下は、青や白のエナメルを引いたような、鱗の生えた魚の尾で終わっていた) からであり、それをレイモンが浴室の鍵穴から覗き見たことで、二人は別れることになる。

本作で、メルジナが「腰より上はうつくしい女子をなごでござるが、腰より下には銀しろがねのやうな鱗が生へて居りました。但しメルジナが人魚の身にかへるのは、安息日の前の日だけで、余の日は、誰が眼にも、平常の女子よのつねに見えたやうでござる」とあるのは、上記に拠っている。“*enamelled blue and white*”を「銀のやうな」としたのは一般的な鱗の色を想起したからであろう。なお、彼女が「人魚」であることは、“*mermaid*” (p.493,etc.) という語や、冒頭 (p.471) の挿絵から明らかである。

「アンリ七世皇帝も、自らメルジナの子孫ぢやと云はれたさうなが」は、“*the Emperor Henry VII. felt no little pride in being able to number the beautiful and mysterious lady among his ancestors.*” (p.483.皇帝アンリ七世は、自分の先祖の中に、美しく神秘的な貴婦人を持つことができるのを、少なからず誇りに感じていた) に拠る。

次の「ハットオ僧正が、飢饉の際に、多くの百姓をその納屋へおびき入れて、食物の消費を防ぐ為に、一人残らず焼き殺した」ため、その「報むくいで、泥魚須でうすの使はされた鼠に、

噛み殺された」という「有名な口碑」も、本書第 18 章“Bishop Hatto”に拠る。“In the year 970, Germany suffered from famine.” (p.447. 970 年、独逸は飢饉に苦しんでいた)。

He bade all who were without bread, and the means to purchase it at its then high rate, repair to his great barn. From all quarters, far and near, the poor hungry folk flocked into Kaub, and were admitted into the barn, till it was as full of people as it could be made to contain. [...] He set fire to the barn, and burnt them all. (p.448. 彼 [ハットー司教] は、パンがなく、当時高価だったパンを得るすべもない人々皆に、自分の大きな納屋に集まるよう命じた。遠近を問わず各地から、貧しく飢えた人々がカウプ [ライン川に面したドイツ西部の町] に群がってきた。そして納屋に入れられ、遂には入るだけ入らせられて人間で満杯になった。[略] 彼は納屋に火を付け、全員を焼き殺した) というのも、ハットー司教は彼等を、穀物を食い荒らすネズミと見なしたからだが、翌日無数のネズミが彼の邸に押し寄せてきたため、ハットー司教は川の中洲に建てた塔に逃げ込む。しかし、

They[rats] have whetted their teeth against the stones, / And now they pick the Bishop's bones ; / They gnaw'd the flesh from every limb, / For they were sent to do judgment on him. (p.450. 彼等 [ネズミたち] は塔の石壁で歯を研いで尖らせ、今や司教の骨までつつき、手足から肉を囓り取った。というのも、彼等は司教に天罰を下すために送り込まれたのだから)

初出に書かれた以上の二話が、単行本『煙草と悪魔』で削除されたのは、「さまよへる猶太人」の話題が散漫になるのを防ぐためであろう。しかし、この二話によって、典拠の同定がより確実になった。

初出・単行本で言及された「ウルスラ上人と一万一千の童貞少女が、「奉公の死」を遂げた話や、パトリック上人の浄罪界の話」も、本書第 14 章“S. Ursula and the Eleven Thousand Virgins”、11 章“S. Patrick's Purgatory”のことである。前者は、聖ウルスラと一万一千人のブリタニアの乙女たちが、237 年にケルン (ドイツのライン川に臨む都市) で殉教したとされる伝説。一万一千という数は、927 年と 941 年に Wichfried 大司教が示した数字である (p.322)。Sigebert of Gemblours (1112 年没) に拠れば、ブリタニアの王 Nothus の一人娘だったウルスラは、“certain most ferocious tyrant” (ある非常に凶暴な暴君) の求婚を避けるため、彼女に付き添わせた十人の美しく年頃の乙女と、彼女ら十一人にそれぞれ従った千人の少女たちと共に、三年間船旅した後でなら結婚する、と条件を出したが、ケルンで偶然フン族 (the Huns) と出会い、彼等 barbarians のために 453 年に殉教したとされる (pp.323-4)。著者 Baring-Gould によれば、捏造された伝説である。

また後者は、アイルランドのダーク湖 (Lough Derg) にあった、煉獄 (浄罪界) に繋がると思われる洞窟の伝説である。聖パトリックが見つけた後、後に修道院を建てたとされるが、1497 年にローマ教皇の命令で取り壊された。Baring-Gould は、オルフェウス神話などと同様、異教徒の国々に伝わる地獄下り譚に基づくとする。

これら四話は、「昔あつた事実」(メルジナ) から、「ハットオ僧正」を経て、殉教や煉獄のような「宗教的な談柄」へ移るよう、配慮されている。そして遂に、「使徒行伝中の

話」から「御主耶蘇基督が、ゴルゴタで十字架を負つた時の話」となるわけである。

五

キリストの磔刑に取材する本作が新約聖書を踏まえていることは、これまで触れてきた通りであるが、その他にも、「ハットオ僧正」の形容「蝮の裔のやうな男」（邪悪な者の意）は、「マタイ伝」3章7、12章34、23章33、「ルカ伝」3章7などに見える“generation of vipers”に拠っている。ただし、“The Wandering Jew”のJ.C.Bulengerの説にも、ヨセフを“he, of that generation of vipers”（p.19）と喩える個所がある。また、多くの百姓を殺した報いで、自分もネズミに噛み殺されたのを、「かくれたるを見給ふ爾の父はあらはに報い給ふべしと、御主耶蘇基督も、云はせられた」と評するのは、「マタイ伝」6章4、6、18による。6章4では“thy Father which seeth in secret himself shall reward thee openly.”（隠れたるに鑑たまふ爾の父は明顕に報たまふべし）とある。

さらに、

遂に、御主耶蘇基督が、ゴルゴタで十字架を負つた時の話になつた。丁度この話へ移る前に、上人が積荷の無花果を水夫に分けて貰つて、「さまよへる猶太人」と一しよに、食つたと云ふ記事がある。前に季節の事に言及した時に引いたから、ここに書いて置くが、勿論大した意味がある訳ではない。

とある個所も、「マタイ伝」21章19でイエスが、“And when he saw a fig tree in the way, he came to it, and found nothing thereon, but leaves only, and said unto it, Let no fruit grow on thee henceforward for ever. And presently the fig tree withered away”（路の傍にある一の無花果の樹を見て 其処に來りしに 葉の他に何も見ざりしかば 今よりのち永久も果を結ぶことを得ざれと之に曰たまひければ 無花果立刻に枯ぬ⁽¹⁵⁾）とあるのを踏まえていよう。イエスの呪いによって無花果が枯れた話を想起させることで、「さまよへる猶太人」に対するイエスの呪いの実現を予告したわけである。「大した意味がある訳ではない」などことさら書くのは韜晦である。

また、ゴルゴタに向かうキリストを見物する、「なめしがは 皮の帯をしめて、わざと爪を長くしたパリサイの徒」や「髪に青い粉をつけて、ナルドの油の匂をさせた娼婦たち」「羅馬の兵卒たちの持つてゐる楯」などは、オスカー・ワイルドの戯曲『サロメ』(Salome、芥川文庫蔵本はLondon Lane, 1912.以下の引用はこれに拠る)に拠った可能性が高い⁽¹⁶⁾。“The Pharisees, for instance, say that there are angels,”（p.2.例えば、パリサイ人たちは、天使がいるという）、“the Queen Herodias, [...] whose hair is powdered with blue dust”（p.4.青い粉を振られた妃ヘロディアスの髪）、ヨカナン（予言者ヨハネ）について“round his loins he had a leathern belt”（p.7.腰には革の帯を締めていた）、“silent, subtle Egyptians, with long nails”（p.10.長い爪の、物言わず捉えどころのないエジプト人）などがある。また、ヨカナンがサロメを“The harlot”（p.41.娼婦）と罵り、“Let the war captains pierce her with their swords, let them crush her beneath their shields”（p.41.軍勢の隊長らをして、劍にて突き刺し、楯の下にて押し潰させよ）と言う場面もある。芥川は、「マタイ伝」14章6-11、「マ

ルコ伝」6章22-28に取材したこの戯曲によって、同時代風俗を描き込んだのではないだろうか。芥川は大正元年十一月十一日に横浜ゲーティ座でこれを観劇。同二年八月十二日浅野三千三宛、同十一月一日原善一郎宛書簡でも言及している。なお、「ナルドの油」はイエスの頭や足に注ぎかけられた貴重な香油で、「マルコ伝」14章3や「ヨハネ伝」12章3に“ointment of spikenard”（ナルドの香膏）と見える。同様の場面で、「ルカ伝」7章37-38では、“a woman in the city, which was a sinner”（邑の中に悪行を為る婦）が、“anointed them[his feet] with the ointment”（香膏を之〔イエスの両足〕に塗り）とあり、“sinner”が「娼婦」を想起させる。

むすび

本稿では、『さまよへる猶太人』が細部に涉って *Curious Myths of the Middle Ages* の“The Wandering Jew”に依拠することを実証した。その上で、本心ではキリストに親近感を抱きながら、周囲に迎合してしまったヨセフの心の弱さに主題があると考察した。併せて、「メルジナと云ふ人魚」以下の四つの話も本書に依拠することを確認した。また、「無花果」への言及等では新約聖書を効果的に用い、時代風俗の描写ではワイルドの『サロメ』を利用した可能性の高いことを述べた。

細部に涉る典拠の利用は予想を越えるものだったが、本作には確かに芥川独自の主題が見られるのである。

〔註〕

- (1) 本書の邦訳『ヨーロッパをさすらう異形の物語』（村田綾子・佐藤利恵・内田久美子訳、2007年10月柏書房）下巻「監修者あとがき」（池上俊一）による。
- (2) 読み方については、「バーリングゴールド サバイン」（高木壬太郎『基督教大辞典』明治四十四年十一月警醒社書店）、「サビン・バリング＝グールド」（註(1)邦訳）、「セイバイン・ベアリング＝グールド」（『人狼伝説 変身と人食いの迷信について』ウェルズ恵子・清水千香子訳、2009年6月人文書院）などがある。なお、『基督教大辞典』では「其最初に公にせる最も重要な著作は『中世の奇異なる神話』にして、」と本書への言及がある。
- (3) *The Jewish Encyclopedia* v.XII (Funk and Wagnalls Company,1906) ‘WANDERING JEW’ や、*The Encyclopædia Britannica*, Ninth Edition v.XIII (Edinburgh: Adam and Charles Black,1880) , Eleventh Edition v.XV (Cambridge: at the University Press,1911) の ‘JEW,THE WANDERING.’ などとも一部重なるが、これらだけでは書けない。
- (4) 以下、引用に当たっては、本作の発表時期に近い1914年版（London, Longmans, Green and Co. の *The Silver Library* 版。660頁。大阪大学総合図書館蔵本。竹友藻風旧蔵）を用い、註(1)の邦訳を参照の上、() 内に拙訳を示した。本書は日本近代文学館所蔵芥川龍之介文庫（以下「芥川文庫」と略）の洋書中に見えないが、既に海軍機関学校に勤務していた芥川が自身で購入したと推測される。なお、東京大学総合図書館蔵本のうち、1868年発行の二巻本は関東大震災後に英国から寄贈されたもの、1874年版は昭和八年十一月に姉崎正治（嘲風）から寄贈されたもの

の。ちなみに、同大駒場図書館蔵本は 1875 年版、国会図書館蔵本は 1872 年版。瞥見した範囲では大きな本文異同はない。ただし、New York: John B. Alden, 1885 年版（同志社大学今出川図書館蔵本。272 頁）は初版 24 章中 16 章のみ抄出したもので、“The Wondering Jew” (pp.5-21) 中にも異同・省略がある。省略箇所には、本作で言及されたエピソードも含まれており、また本作で言及された 4 章の中では“Melusina” (pp.204-235) しか収録されていないので、これに拠ったとは考えられない。

- (5) 出典は「マタイ伝」16 章 28。以下、聖書は *The Holy Bible, Containing the Old and New Testaments* (London, George E. Eyre and William Spottiswoode, 1878) に、訳文は芥川旧蔵本と同版と推測される『旧新約全書』（大正三年一月米国聖書会社、発行者米国人エツチ、ダブユー、スワールツ。同志社大学今出川図書館蔵本）に拠り、適宜一字空けを施した。
- (6) 原註に、“Greve, Memor. P. ab. Eitzen. Hamb. 1744.” とあるが、*The Encyclopædia Britannica, Ninth Edition*（前掲註(3)）では、後述⑬の Chrysostomus Duduleus Westphalus を出典としている。
- (7) *The Encyclopædia Britannica, Ninth Edition*（前掲註(3)）では、Dr Paulus von Eizen の話として次のように記す。“He appeared at Hamburg, in 1547, giving his name as Ahasuerus, and stating that he had been a shoemaker in Jerusalem who would not suffer Christ to rest at his door when fainting under the weight of the cross. He struck Jesus, and bade him move on. Jesus said, " I will stand here and rest, but thou shalt go on until the last day.”（彼 [さまよえるユダヤ人] は 1547 年にハンブルクに現れた。アハスヴェルスと名乗り、自分はエルサレムで靴屋をしていたが、キリストが十字架の重みに気絶しそうになっているとき、家の戸口で休むのを許そうとしなかった、と述べた。彼はイエスを打ち、どんどん進むように命じた。イエスは言った。「我は立ち止まり憩はん。されど汝は末期の日まで歩まん」）。ここでは“*He struck Jesus,*”と明示されているので、あるいはこれも参照されたかもしれない。
- (8) 単行本『煙草と悪魔』（大正六年十一月新潮社）では「ホオルマイエル」。
- (9) “Some impostors assuming to be the mysterious Jew, or lunatics actually believing themselves to be him, appeared in England in 1818, 1824, 1830.” (p.25. 謎めいたユダヤ人のように装った何人かのペテン師だとか、自分をさまよえるユダヤ人だと実際に信じている狂信者たちが、1818, 1824, 1830 年にイングランドに現れた) とある。
- (10) 当時の英和辞典で“bloodworte”を採録するのは、管見の範囲では『井上 英和大辞典』のみである。本作で「十字架の上に、I・N・R・I の札をうちつけた」とある「I・N・R・I」も、本書に「Jesus[Jesus] Nazarenus Rex Iudæorum 《羅＝Jesus of Nazareth, King of the Jews, 猶太人の王たるナザレスの耶蘇》の略」とある。この箇所は、『全集』注解にあるように、「ヨハネ伝」19 章 19「And Pilate wrote a title, and put it on the cross. And the writing was, JESUS OF NAZARETH THE KING OF THE JEWS.」（ピラト罪標を十字架につけ 此はユダヤ人の王なるナザレのイエスなりと書たり）による。なお、この語自体をどうやって知ったかは未詳。
- (11) 芥川の依拠資料は不明だが、例えば、*The Encyclopædia Britannica, Ninth Edition* v.XI(1880)によれば、“HERBELOT, BARTHÉLEMY D’ (1625-1695), Orientalist, [...]His great work is the *Bibliothèque Orientale,*” などとある。
- (12) 「悲しみも喜びも超越した、不思議な表情を湛へ」た「御眼」には、キリストの聖性が示され

ていよう。

- (13) 例えば、前掲宮坂論文は「この作品は、ここ [「されば恐らく、エルサレムは広しと云へ、[略] 総じて罰と贖ひとが、ひとつに天から下るものでござる」を指す] に向って、書かれたといつても過言ではあるまい」とする。
- (14) ただし、能勢の行動は、あえて他人のふりをすることで、父の思いを無遠慮な周囲の嘲りから守る苦肉の策であった。
- (15) 「マルコ伝」11章13,14,20,21にも同様の記述がある。『西方の人』(昭和二年八月『改造』)28「イエルサレム」でも、「彼[キリスト]は道ばたの無花果を呪つた」云々と紹介する。
- (16) 念のため、Ernest Renan の *Life of Jesus*, 1891 を見たが類似個所なし。

[付記] 引用は、特記したものを除いて初出に拠り、漢字は通行の字体を用い、ルビを適宜略し、明らかな誤記・誤植は訂した。[]内の注記は須田により、改行は「/」で示した。本稿は、科学研究費補助金基盤研究(C)「日本近代文学館所蔵芥川龍之介文庫和漢書の書き込みに関する文献学的研究」(課題番号19520151)による研究成果の一部である。

(すだ ちさと・本学大学院人間・環境学研究科教授)